



神道黑住教神理概論俚諺解 完

特別
イ 4
3163
190



貴
14
3163
190

大教正五位森下景端校正

少教正片岡正占註釋

神理概論俚諺解 完

明治十七年
十二月出版

朝陽堂藏版

神理概論俚諺解序

神理概論何の如きべきも出題一致神々なる

教祖聖祖の神理を編述するもの代り者多し又

其俚諺解の愚史を撰録の如し易きと云ふ

云々俚諺を以て敷叙せしもの如し抑或る如く

教祖神々を直接の神を俚諺の如き修以

野見崇望の著書に於て愚史を撰録し俚諺

等々俚諺を以て敷叙せしもの如し抑或る如く

申

朝陽堂

其教 教祖神劇始の新なる深き修

徳の日 天照大御神と稱おせ給ひし時

下地の靈元と感得ありしより日影の道標を

教の明し給ひし神徳宇宙に洋溢し靈光に

潤み照耀し本なる位の本徳此神徳を尊奉

し其高き神天の如き名を尊奉地のかく物

と雖も名状為さぬも一にたす身福しと奉

直接と稱し靈妙 意裏あり實に天地

冠以海未なるの赫然あり方なりては

趣く昭代に際し此日存のな但四海に流るる

世に天の裁命の裁計の至り者ありては

八箇事易き方々 惟神あり神徳あり

存神忠存至誠の妙用ありて教育に

存後快活の徳を承りて教を愚ま愚鈍も存

感信信心の念を以て一處を思ひなりし神徳

凡例

一此神理概論の本文このしりがいろん ほんぶんを

教祖神遺教中の緊要けいそそのごころけいじちゅう かんえん

なる教語を親灸門人等の編纂けうご おぢきもんじんたらいん へんさんし一枚摺いちまいずりと為な

して本教確信の教徒の必讀ほんけうけつしん けうと かならばの為め世小公よ せうこう小

せしを猶衆徒の中なほしゅうと ちゆうハ其意了解そのいまいかいし難がたき節々せつせつ

あるを以て今回更ここのたびさらニ本文ほんぶんをも校正けうせいし俚諺りげんも

注釋とくありし其意を了得そのいごころ がつてんち為さしむるを要えんとし

一本文中校正ほんぶんちゆうけうせいしたる文ぶんは正直しやうぢきハ神意しんいなり神徳しんとく

ありと有りしを正直ハ水火兩靈の神徳より
 てと改め又(生々養無の心法朝昏練磨精修を
 へしと有りしを練磨精修をる所以ありと換
 へ又増加したる文ハ(本派確信の教徒)とあり
 一 本派の上は故よと云ふ二字を加へ又(天よ
 任すとハ教徒たらむ者)とありし天よの上
 二 我といふ一字を加へ教徒たらん者(の)を
 ハ二換へたり依て是よ校正を告ぐ者此意

を諾へ

一 註釋文の傍訓ハ上下よ通暢易きを以て直讀
 とせり

追告本文中(其我を離きたる無念)とあり
 一を誠の一字よ改めたり

神理概論俚諺解



大教正五位森下景端 校正

教祖神遺教親灸門人等傳習 謹述

少教 正片岡正占 註釋

謹つとて惟おもるに我わが神道しんどう黒住派くろじまはの教法けうほうハ源流げんりゅう一派いっはを
為なす多岐たぎ小涉せうしやらば能よく教祖けうその足跡あしあとを履踐ふみ能よく
教祖けうその御心ごころを以もつて心こころとをとるを眼目がんもくとして

此段ハ此神理概論を記せる門人等の意見よ
 て黒住派ハ他神道の教法トハ其依て起り
 源流の異なる趣旨をかき出志しものなり
 源流一派トハ本教ハ教祖宗忠神自然の天授
 不て感得たまひ不測の靈驗を教へ給む
 不より天命直授の教法トハ稱をまり故不神
 道の教法他教と異りて多岐不涉らば一派の
 教法おもはば此左京が瀬踏を致す皆々付て御

出るさまと説給ひ其足跡に従ひ教祖の御
 心に背のぬやうに道の修行をする事を目的
 とするが将佳と云の竟見なり源流一派多岐
 等ハ瀬踏の伏案なり
 教祖曰心正直にして明のなまむ日神の御心と
 一體なり日神の御心と一體なる事を知れば其
 陽徳不化育せらむて萬物生々の道理自ら覺悟
 する所あるべし

此一段ハ本教教旨の起因を擧て神理の大躰
 と示しとるものなり御小傳の中凡天地の
 間小萬物生々たる其元を皆天照大神なり是
 萬物の親神よて其御陽氣天地小遍満り一切
 萬物光明温暖の中小生々養育せらるゝ息む
 時なり實小難有事なり各體中又暖氣の有る
 ハ日神より受て具へとる心なり心ハこぼる
 と云義小て日神の御陽氣が凝結て心と成る

かり人欲をさり正直小明くるまバ日神と同
 ド心なりとある文意を能々味ふときハ覺る
 所あるべし○正直の正ハ水の本体小て横小
 平りぬる事を表し直ハ火の本体小て豎小轟
 りなる事と表し陰陽和合の妙味を含める形
 り此一段ハ本教修行の工夫を勉むべき緊要
 の柱礎なり

又曰く教ハ皇大神の御教道ハ日神の大道造物

主ハ日神の働いさむき一切萬物光明温暖の中うち小養育やういくせられて生々息せんくむ時ときちとの教傳けうでんあり

此一段ハ本教の三綱領さんかうりやうよて教旨けうしの在ある處ところ神

理りの生うずる所ところなり又曰いはくとハ教祖けうその御詞ごことばを

再またび掲かぐるを云い教ハ皇大神みかみの御教ごけうとハ書紀しよき

神代卷下しんたいまきしたニ天照大神あまてらすかみ手持寶鏡たのたまひ授たま天忍穗耳尊あまの忍穂耳尊

而祝之曰いは吾兒わがこ視此寶鏡みたま當猶視吾あた可與よ同ひと休やす共い

殿どの以為齋鏡いづかみ又勅皇孫またあまの孫曰いは葦原あしはら千五百秋ちひさかぜ之瑞穗のすい

國くに是吾子孫わがこ可よ主し之地のち也宜爾皇孫いれみかみ就而治あ焉を行な

矣寶祚あまのたま之隆たか當與天壤無窮あまのたま者矣此二訓このふたごころハ父子

有親ありの親愛しんあいと君臣きんしん有義ありの大義たいぎと小係こけいとと尋い

倫りんの大綱たいかう萬古まんこ不易ふえきの神勅しんちく即すなはち皇祖みかみの豫言よげん小

まま一ひと刀やいば一ひとて天壤無窮あまのたまの寶典たから教けうの由よして生うずる

所ところなり○道みちハ日神ひのかみの大道たいだうとハ自然しぜんの天造あまの地ち

化まふて道みちの開ひらけ行ゆく様さまを示しめ給たまひ給たまひ教語けうごを

り天照日あまてらすひの大神おほなみかみ地球ちきう上うへ小照臨せうりんなな給たまふや光ひ

明温暖の大气天地不遍満り四時行を萬物化
 成する生々自然の養育實不息む時るく圓頭
 方足よして知覺を存し不測を躰とし妙を用
 とせるもの誰り斯道不由らざるを得むや道
 ハ大路の如くよして萬人の由る所之を日の
 神の大道とハ稱せるなり○造物主ハ日神の
 働ら起とハ外國よ云造物主とハ少く異
 る所あり畏くも日の神の働きとハ光明温暖

の功用を稱し給ひしとのなり前段の註釋ハ
 も掲げし如く天照大神ハ萬物の親神とある
 ハ其照照為し給ふ光明温暖中より萬物を産
 み出すを云實し宇宙の間は比較するは物るハ
 無上尊大なる圓靈の活動是なり御形は係る
 の御名ハ即ち天照大神○一切萬物より以
 下ハ前に註釋せるを以て是は贅也
 是此教傳ハ正直の誠を以て本と爲誠ハ人の心

性せい不ふ寓ぐする神しん德とく一いして道みちの誠まことハ正直しやうぢきなり正直しやうぢき
 ハ水みづ火か兩りゆう靈りやうの神しん德とく一いして天てん意い人心しん二につ無なき夏なつ
 何なにの疑うたがひり之これ有ある維い我が神しん道みち神しん理りの存ぞんずる所ところ一い
 して我わが教けう徒たう畏おそ敬けい尊そん信しんするの教けう法ぽうなり
 此こ段だんハ教けう旨しのこ小こ結けつ束そく一いて水みづ火か兩りゆう靈りやうの妙めう用よう天てん
 意い人にん心しん二につふかまを證あしん神しん人にん不ふ二に幽ゆう顯げん一い致ちの
 蘊いん奧おく一い溯さくる伏ふく案あんなり正しやう直ぢきの誠まことを以もて本もとと以もて
 とハ御ご小せう傳でんに人にん欲よくを去さり正しやう直ぢき一い明あきりかまハ

日ひ神かみと同おな心こころなりとある御ご詞ことば一い依よりて記しるす
 ものあり○誠まことハ人ひとの心こころ性せい不ふ寓ぐする神しん德とく一い
 てとハ日ひ神かみより受うけ具ぐへたる心こころの德とくハ即やがて
 神かみなり其その神かみが即やがて誠まことなりと云いふ義ぎなるべし
 ○道みちの誠まことハ正しやう直ぢきなりとあるハ斯この道みち一い誠まことと云い
 ふハ正しやう直ぢきを根もと據ととせるものぞと諭さとせる詞ことばなり
 一い○正しやう直ぢきハ水みづ火か兩りゆう靈りやうの神しん德とくとハ正しやう直ぢきハ即やがて
 日ひ月げつの御ご心こころなりと諭さとさまたる意いなり○神しん德とく

ハ至公至大にして天地の間不塞る光明温暖
 の大氣萬物を化育するの妙を云ふ○天意ハ天
 照大神の御心の誠を指す人心ハ大神より受
 得たる大神の御分心の誠と云ふ意なり○二
 つなき更何の疑ひり之あらんとハ神人不二
 の御教疑ふべうらばと云ふ伏案なり○維我
 神道神理の存する所とハ吾教祖の説給へる
 神道ハ此神人不二養無一誠の神理存して

あるが故小畏敬尊信すべき教法ぞと稱賛て
 本教の大旨ハかくの如きものと擧て教徒
 一示一諭せるもの也

夫ハ天地の造化ハ天日の陽徳不照照せられて
 萬物自ら化生一本派一稱する一神萬神々々一
 神の神徳神功逐次一相擧り天地否の妖氛漸く
 消散して地天泰の祥雲稍や靉隸き今日の開明
 を成一ハ幽顕一致神人不二の名教因て起る

偶然^{ぐぜん}ニ非^あざるふり

此一段ハ端^{はた}を改^{あらた}め造化自然^{ざうわしぜん}の妙用世運^{せうん}の進^{しん}歩^ふ時勢^{ときせい}の隆替^{りゅうがい}自ら開化文明^{かいわぶんめい}ニ赴^{おもむ}く徴候^{ちゆうこう}を述^のべ名教^{めいけう}の興^{おこ}る所以^{ゆゑん}を序^{けい}でしものよて日神^{ひのかみ}の大道^{だうだう}と造物主^{ざうぶつしゆ}の働^{はたら}きとの二義^{にぎ}を弁釋^{べんしやく}して斯^あ道の萬道^{ばんだう}に勝^{まさ}れたる所以^{ゆゑん}と造化自然^{ざうわしぜん}の妙用^{めうよう}とを論述^{ろんじゆつ}せしものふり○夫^{それ}とハ發端^{はつたん}の辞^{ことば}ふり天地^{てんち}の造化^{ざうわ}とハ古語^{こご}ニ所謂^{いふやうなる}天地^{てんち}位^ゐ馬^ば萬物^{ばんぶつ}

育馬^{いくば}とある其自然^{そのしぜん}の妙用^{めうよう}ハ云々^{いんいん}ある理^りあるものふと云^いふ意^いなり○天日^{てんじつ}の陽德^{やうとく}とハ天照^{あまてらす}大神^{おほみ}の御德^{おんとく}よて即^{すま}ち光明温暖^{くわうめいおんをん}の化育^{くわいく}を云^いふ照照^{せうせう}とハ明照^{めいせう}温潤^{おんじゆん}の功用^{くわうよう}を云^いふ意^いなり萬物^{ばんぶつ}自ら化生^{くわあう}しとあるハ前条^{ぜんじょう}も既^{すな}に論^{ろん}へる天^{てん}照大神^{あまてらす}の陽德^{やうとく}即^{すま}ち光明温暖^{くわうめいおんをん}の活用^{くわうよう}寐^みても寤^ごても忘^{わす}らさざる難^{あやう}有^あき尊^{たふ}と事^{こと}を稱賛^{しやうさん}せしものふりの本派^{ほんはい}ニ稱^{しやう}する一神^{いちしん}萬神^{ばんしん}々々^{いんいん}一神^{いちしん}

の神徳神功逐次に相擧りとある一神ハ天照
 大神を申萬神とハ八百萬神を云ふなり今ハ
 百萬神と分ちハあまとも其本ハ天照大神の
 一神なり其一神の陽徳ハ照照此て八百万神
 と成り萬物と化生せる神徳神功と云ふ意な
 り神徳ハ恩恵ニ由りて神功ハ成績なり逐次と
 ハ次第ニと云ふ義なり相擧りトハ万物の整
 ふを云ふなり是迄ハ日の神の大道造物主の

起因を説き次ニ日神の大道其妙天地自然の
 開化ニ論及せしものなり○天地否の妖氛漸
 ヲ消散しとある天地否ハ易の卦名なり天地
 否ハ乱世の象ニ由りて天高く上り地低く下り上
 下離隔て事情上下ニ達せざる之を否と云維
 新前の景象なり又病氣不て云ハ病瘡の病
 由りて陽尤り陰滞る時ハ元氣竭て人事分らざ
 るが如きを云ふ誠の心傳ハ陽氣ゆるむと陰

氣強るるり陰氣勝時ハ穢かりとあると同ト
 義かり此故事を引たるハ吾本教の教旨徹上
 ざる餘意をも含めりなり妖氣ハ邪氣を云是
 比喩よて我國も保元平治の喪乱以来王綱
 紐を解き皇維紊乱せハ恰も妖氣の否塞り
 たる如き景象れり一不維新以来其妖氣漸く
 消散して今日の昭代よ立復る氣象を云へる
 かり地天泰の祥雲稍や變隸きとある此地天
 泰と云ふも同トく易の卦名不て地天泰ハ泰
 平の象よて降下る地氣上よ位一昇騰る天氣
 下よ位一天地相感應一ニ氣相交通する之を
 泰と云維新以後の景象よして本教も隆昌よ
 向ふの前兆かり四時行えれ百物成るハ陽徳
 長トて陰氣消する時勢の隆替消長せると同
 一理かり保元平治以来の妖氣消散して明治
 今日の祥雲變隸て稍蒼生の疾苦を免るゝと

云ふ義ぎふり祥雲しやううんハ目出度めでたきくも雲うんるりるり變た驟ちゆうきてと
 ハ邪氣よまき退散たいさん一祥雲しやううん鬱う葱そうなるを以もつて泰平たいへいを象しやう
 する形容詞けいようしふて治乱ちらん變遷へんせんの摸様もしやうを如此かく陳述ちんじゆ
 一ものあり是吾本教われほんけうの隆昌りやうしやうも天地てんち否ひの厄運やくうん
 より變遷へんせんの比喻たとへ一如此かく書きたるものよふむ
 ○今日こんにちの開明かいめいを成一せいとハ前記ぜんきの如ごとく隆替りやうかひ消
 長ちやうの變遷へんせんありて遂すなはち維新いしんの御世ごよと成りて萬
 般ばん御改革ごかいはく不成なる時ときよ至いたると云ふ意いふり○幽ゆう

頭げん一致いち神人しんじん不二ふにの名教なめう因よて起おこるも偶然ぐぜん一
 非あるふりとある幽頭ゆうげん一致いちとハ幽界ゆうかいも頭界げんかいも
 一致いちよて何なにも替かる事こと無なしと云ふ義ぎふり神人しんじん
 不二ふにと云ふハ神かみも人ひとも同根どうこん同体どうたいよて二ふたつの
 ものよあらばと云ふことふり名教なめうとハ天照あまてらす
 大神おほうみより教祖けうその神かみへ不思議ふしぎの神傳しんでんあり一稱いせう
 辞ことばふりこそを本教ほんけうよて所謂すいぜう日神ひのかみの大道おほみちと云
 ふ此大道このみちも維新いしん以前いぜんハ否塞ひさいの事こと多おほりり一が

維新以後ハ祥雲變隸テ所謂陽氣旺盛の時至
 リ斯道の開け行べき世と成り、此共又浮薄
 輕燥の時弊起らざるを得ず之を矯正せる名
 教の興るハ全く神議よて偶然の事ハある
 まトとの意あるべし

嗚呼幽頭一致神人不二の教傳ハ假設の神理
 非ずして我國固有の神理を存する真教あり
 此段ハ承前起後の詞よて本教ハ假設想像の

神理ニ非む所謂惟神の神道たるを證明せる
 ものあり嗚呼とハ歎美の辞あり幽頭一致神
 人不二を前段ニ既にいへるが如く本教の教
 語なり此教傳ハ他教と異しして人造の假
 設けたる神理ニ非ずして我國ニ皇大神の傳
 へ存置給ひし神教の神理固有る真の教あり
 との意あり

故ニ本派尊信の教徒確信貳なく生々養無の心

法朝昏練磨精修する所以なり

本派とハ黒住派の事にて派ハ明治九年別派

獨立を允可し時の名かりしが明治十五年十

一月二十二日改稱して今ハ神道黒住教と改

めらまゝなり○尊信の教徒確信貳なくとハ

當教ニ神文を捧呈し年来一意ニ成り貳心な

く本教を確く守信仰する所以のものハ生々

養無の心法離るゝ忍びざるの實あるが故

かり爰が惟神の神理を存する真教と云ふ義

あり○生々養無の心法とある生々ハ日月兩

靈の活物本教にてハ生通しと訓む光明温暖

の陽徳かり養無の無ハ有無の無ニ非びて

光明温暖の大气ハ目も見えび手も取ま

ざれ共萬物を化生の良能あるを以て古きを

靈無と云故ニ此靈無を養ふを本教の主眼と

し心法ハ心のもちあふと云ふまゝなり朝昏ハ

あさをむを云ふ練磨精修（せんま せいしゆ）とハ心（こころ）も身（み）も清淨（せいじやう）
 として御陽氣（ごやうき）を戴（おほ）き心（こころ）を養（やしな）ひ面白（おもしろ）く樂（たの）しく
 難有（あやう）き一心（いっしん）と成（な）りて修行（しゆぎやう）すべしと云ふ意（い）ふ
 り然（しか）る時（とき）ハ生通（いきどほ）の道（みち）と至（いた）らるゝそとの義（ぎ）を
 かく示（しめ）したるものあり
 然（しか）り而（しか）して我教法（わがけうほう）と教（けう）と道（みち）との差別（さべつ）あり
 此段（このたん）ハ前段（ぜんたん）を承（うけ）て教（けう）と道（みち）とハ區別（くべつ）ある所以（ゆゑん）
 を示（しめ）したるものあり然（しか）り而（しか）してとハ前段（ぜんたん）の

生々（せいせい）養無（やうむ）の心法（しんぽう）を心得（こころえ）然（しか）して教（けう）と道（みち）との差（さ）
 別（べつ）ハ次（つぎ）の文（ぶん）とて心得（こころえ）べしとあり
 誠（まこと）を取外（とれ）する天（てん）と任（まか）せよ我（われ）を離（はな）れよ陽氣（やうき）と成（な）
 是活物（いきもの）を捉（とら）えよ此五個（このいつご）を以（もつ）て教（けう）の順序（しゆんじゆ）とに
 此段（このたん）と次段（つぎのたん）とハ教（けう）と道（みち）との細目（こまめ）を擧（あげ）て源流（げんりゆう）
 一派（いっぺい）の教脈（けうみやく）を記（しる）すものあり此段（このたん）を本教（ほんけう）と
 てハ教（けう）の五更（ごせい）と云ふ義解（ぎげん）下條（げうじょう）本文（ほんぶん）と明（あき）ら
 是を此所（このところ）と贅（あが）び委（まか）しくハ其處（そのところ）と付（つ）て并知（びやうち）す

一

道の順序ハ誠を取外さる活物を捉えよ陽氣よ
 不我を離れよ自然よ任せよと云ふ五個よ
 て恰も環の端なきが如く幽頭一致神人不二の
 妙用を含めり維我宗家相傳する所の教祖口授
 の教語あり

此段ハ道の順序を立て記したるものよて教
 も同トく五個よして恰環の端なき様ありと

美稱しものふり幽頭一致神人不二ハ既ニ解
 り維我宗家相傳する所の教祖口授の教語ふ
 りとハ神道黒住教々祖宗忠神より二世三世
 へ相傳へらる、教語よして他教ニ其類なき
 を云ふ

爰小天ふ任ふと自然ニ任むとの區別を分解す
 礼を天ニ任すとハ我教徒たらむ者ハ行住坐卧
 患難流離の際一己一身ニ係る修行上の教規ニ

して
 此段と次の段とハ天造人為皆造化化成の妙
 又歸するを示しとるものなり行住坐卧ハ立
 ても居ても寝ても覺てもと云ふ意なり患難
 流離ハ病患死難又逢ふとも分散退轉の災厄
 又罹りてもと云ふ意なり一身一己ハ自分の
 身の上の支かり斯の如き憂き目又逢ふも皆
 天より我は修行を仰付らるゝ天の試験と思

以諦視よと宣給ひ一教規なりとの意なり
 自然に任すとハ之を小にせよとバ日日の行為樂
 天安命之を大にすを況く世上を大觀一時勢
 を知り氣運を審し一奉教修道の真理を擴充し
 時中するの道規なり
 此段ハ前段を受て天に任すと自然に任すと
 の區別を細論して奉教修道の要ハ時中の二
 字に止る事を諭しとるものなり日日の行為

とハ家業世渡りの志りよめて日日難有^{こと}此^{こと}更^{こと}を取外^とさぬやうよ足^たる^{こと}更^{こと}を^{こと}しり^{こと}已^{こと}が受得^{うけえ}る^{こと}天^{てん}の御擬作^{かあてづ}を大切^{たいせつ}に勤^{つと}むる^{こと}を云^いふ^{こと}樂天安^{らくてんあん}命^{めい}とハ天道^{てんたう}を樂^{たの}しむ^{こと}行^{ゆく}も歸^{かへ}る^{こと}も生^いる^{こと}も死^しぬ^{こと}る^{こと}も天命^{てんめい}有^あ無^な生死^{しじ}の四^し苦^くも天命^{てんめい}ふれば其^{その}天^{てん}命^{めい}といふ事^{こと}を悟^{しり}り得^える^{こと}時^{とき}ハ本心^{ほんしん}定^{さだ}まる^{こと}が故^{ゆゑ}に安^{あん}心^{しん}かりと云^いふ意^いふ^{こと}是^{これ}迄^{まで}を自然^{じぜん}に任^{まか}す^{こと}の^{こと}小^{せう}を云^いふ大^{だい}を語^ごもバ沉^{ひる}く^{こと}世^よ上^{うへ}を大觀^{たいくわん}すもバ

治^ち乱^{らん}興^{きよ}廢^{はい}ありて世^よの變^{へん}遷^{せん}する^{こと}有^あ状^{じやう}を觀^{くわん}察^{さつ}す^{こと}る^{こと}更^{こと}を云^いふ時^{とき}勢^{せい}を^{こと}知^しり^{こと}氣^き運^{うん}を審^{しん}じ^{こと}とハ譬^{たと}へ^{こと}バ更^{こと}始^し一^{いつ}新^{しん}廢^{はい}藩^{はん}置^ち縣^{けん}と成^なり^{こと}も天^{てん}時^{とき}ふり^{こと}と心^{こころ}よ^{こと}了^り解^げする^{こと}の類^{るい}を云^いふ又^{また}奉^{ほう}教^{きやう}修^{しゆ}道^{だう}の真^{しん}理^りを縮^{しゆく}言^{げん}すもバ解^{げん}除^{じゆ}一^{いつ}誠^{じやう}かり^{こと}解^{げん}除^{じゆ}とハ身^みも我^{われ}も心^{こころ}も抛^な棄^すする^{こと}を云^いふ一^{いつ}誠^{じやう}とハ誠^{まこと}一^{いつ}つよ^{こと}止^{とど}り^{こと}之^{これ}を擴^{くわく}充^{ちゆう}る^{こと}を云^いふ時^{とき}中^{ちゆう}する^{こと}とハ過^{くわ}不^ふ及^{きふ}あ^{こと}くして時^{とき}處^{ちよ}位^いの中^{ちゆう}道^{だう}を^{こと}得^える^{こと}が時^{とき}中^{ちゆう}する^{こと}の

道規ふりと云ふ意ハ信心堅固ニ朝旨を遵守
一吾本教を固守て生生の真理を明悟て斯道
の天然自然の時至り頭を開くるニ中る其道
規ふりと云ふ義あり

格言ニ云く言淺くして旨遠きものを善言なり
と夫是等の謂あり

格言とハ古人の言置くる詞の道理ニ適ひ法
規ニ違ハぬを云ふ言葉ハ淺淺として能く

聞て見もバ其旨意遠く深きハ善言なりと云
ふ古語の意あり此ハ前段の教規道規をさし
て稱歎せしものあり

又誠を取外せると云て教祖の心ニ悪しと知り
ふがら身ニ行ふ事の無き様ニ為む神とあらる
べしと思量き給ひしを云

此條より以下の四條ハ教の五事ニ證左ある
事を擧て示しするもの也此條を神人不二天

地一体の誠を勤めて神の行ひを為し信心自
 修して心は神を拵へ神はなる執行を示した
 る教語なり是則ち幽顕一致の神理にして尤
 戒慎恐懼べき要旨あり

天は任すとハ壽限の際心衷は天命と覺悟為し
 給ひしを云

此條ハ御小傳中ハ文化九年の秋父母共ハ痢
 疾にて暫り七日の間ハ神退せしりハ教祖悲

哀給ふ夏大方ならず遂癆瘵の病を煩ひ文化
 十一年の春は至り壽限ハ云云とある文意を
 抜抄して天は任すの眼目を記したる教語な
 り誠の心傳はも只何夏も天は任せ此世は置
 て入用はなる小子から御引取とあるべし又
 世の為は少しでも相成ものならば快よく相
 成と存候處不思議ハ相直り候のそから初
 よりまじふいとを奇妙成る事甚多く全く

御蔭ごかげと奉存候たてまつりぞんぞろとある文意ぶんいをも合あせ見みて天てんに
 任ますと諭さとし給たまひし要旨ようしを并知びんちすべし
 我われを離はなるゝと又終焉とまりに臨のぞみ從容じゆじゆとして死しを決けつ
 し給たまひしを云いふ

此條このぢう又教祖神けうそしんの我われを離はなるゝ給たまひし一ひとを論ろんし以もつ
 て世人よのひとに我われを離はなるゝと記しは如此かく心得こころえよとの
 教旨けうしかり初條しよぢうに誠まことを取外とりのぞさぬハ心こころに神かみを拵こしら
 へ神かみに成なる修行しゆぎやうを示しめし給たまひ其神そのかみに成なる修行しゆぎやう
 を為せんと思おもはば天てんに任まる心こころにからざれば
 神かみに成なる能あたるべし天てんに任まる心こころに成ならんと
 思おもはば我われを離はなるゝが天てんに任まる能あたるざる
 順序じゆんじゆを能あたる味あじをひ見みべし是即心これすなはちこころのこよして
 形かたちを忘わすれし形かたちを忘わするゝが即ち我われを離はなるゝふ
 りとの意いなるべし

陽氣やうきよふとハ陽氣やうきよなるならば病やまひハ自おのら愈い
 べきものと思惟おもひ心こころを養やしなひ給たまひしを云いふ

奉りて此一條の教語の難有此事を悟るべし
 活物を捉えよと心氣快活天地生生の靈氣を
 自得え給ひしを云

此條の活物と云ふハ恐くも天照大神の本熱
 よして道の本体誠の元素あり其誠の妙用即
 ち活物あり其活物を取も直さず天照大神の
 御心あり其御心が即ち宇宙に累積る光明温
 暖の御陽氣あり然る故に前條に陽氣に成る

と諭し給へる天地の活物を御陽徳あり其陽
 精と陰靈が凝結て人の身心と成るるあり然
 すまハ神人一体なる其何の疑ひり之あらむ
 故に教祖ハ形ちの其を忘る本心の誠一に成
 て能く靈無を養ひ給ひ面白く樂しく信心怠
 り給えざりしより陽氣を身体に充め給
 ひしが故に天地の活物を捉え給ひしあり依
 て世人もあく心得よとの教語を傳へ給ひし

事を能々明悟して天地生々の元氣を養營胸
 中の雜念を除却よと示し給ひかり
 此五個を以て源流一派の濫觴と為す故に道を
 信ずるよハ先心よ悪しと思えん身は行ハざる
 様よ支々物々反省て誠を取外さむ天よ任せ我
 を離れ陽氣よかり活物を捉えろが即ち足跡を
 履踐の順序よして教と道との因て生ずる所か
 り

此段ハ教の五事を収束教の起因を叙列て道
 の生ずる所以よ論及せしものなり此一段を
 教の五支を以て教祖の此左京が瀨踏といふ
 以皆々付て御出ふさまと導び給ひ足踏
 を履み踐とさハ神とあらるゝとの教意を陳
 述しものなり此五支の順序よ因て道の生ず
 る所以を提起しものなり次条を見て并知を
 べし

教立て道生ず道ハ名あり其本体を誠と云誠を
 天地生々の元氣あり其元氣が活物よて活物と
 ハ陽氣あり陽氣よあるよて我を離る、より善
 きハ一我を離る、て自然よ任すより善きを
 一其我を離るよる 誠が本心自然の活物あ
 り

教ハ前段の五支よして御小傳よ教ハ天より
 起りとあるハ是の謂あり道生むとハ道ハ人
 の由る所の名あり教よ據らざれば其道を履
 む事能てび道よ依らざれば誠の門よ及び堂
 よ上り室よ入こと能てざるハ自然の道理あ
 る支云ふを俟ざるふり然る故よ教立て道生
 ずとハ書きしものふり斯道よ於て道と云ハ
 只名目よして其道と云もの、本体を誠と
 云ふ意あり御小傳ハ自然と天より顕る
 、ふりと示し給へるを思ふべし天地生々の

元氣ハ即ち天照大神の誠を云ふ義あり其
 誠が直に活物其活物が直に神あり其神が直
 に誠ありとの義にして所謂環の端無きが如
 き妙用自在の神徳あり依て道の順序ハ誠を
 取外すな活物を捉えよ陽氣に成ま我を離れ
 よ自然に任せよと諭し給ひかり然きを陽
 氣にありよハ我を離れて自然に任せよと
 かりはりせば本心自然の活物を捉えたるか

り其捉えたる活物が即ち誠の本体天照大神
 なるもバ神人一躰にあり修行が即ち斯道の要
 目ありと云ふ意あり

我を離れたる効験を知らんと要せむ心が
 大磐石の如く鎮ると云の教語を味へよ活物を捉え
 たる効験を知らんと要せば氣分が朝日の如く
 勇ましく成ると云の教語を思へよ心大磐石の
 如く鎮り氣分朝日の如く勇ましく快活なる時

ハ萬物生々の神理自ら明悟する所あるべし
 此一段も前段の道の順序を履み我を離れ活
 物を捉えたる方嚮を指授せし要語なり身を自
 然に任せば我を離れたるなり心を陽氣に成
 せば活物を捉えたるなり其効驗の如何を知
 りんと思へば心が大磐石の如く鎮ると氣分
 が朝日の如く勇ましくなるといふ教語に依
 て勤考せるとさへ此要領の意明りし悟らむ

神理自ら知らるゝものぞと云ふの義あり
 其心鎮り氣分勇ましく中より浮み出るの一念
 が本派嫡々の真教天道自然なる正直の誠より
 て日神の活動萬有の元素なり是之を本派神道
 神理に入るの門とす
 其心の鎮るハ自然に任せたる効驗なり其氣
 分の勇ましくなるハ陽氣にありたる効驗と
 了得たると此ハ心の鎮まると氣分勇ましく

其中そのうちより自然しぜんより浮うこ出るいづ一念いちねんの誠まことと云いふ物もの
 が黒住派くろぢうまいに於おいて専主義せんしゆぎとする所ところの嫡てい々く不ふ
 易えきの真教しんけう天地自然てんちしぜんの道理たうりにして想像さうざう假設かりせつの
 神理しんりは非あび自然しぜんの活物いきもの水火すゐ兩靈りゆうりやうの妙用めうりやうを具ぐ
 有いせる正直しやうじきの誠まこと即すなはち天照大御神あまてらすおほみことの御心おんこころの本ほん
 躰たみ萬物ばんぶつ一体いつたいの元素げんそを云いふ事ことあり本教ほんけう尊信そんしんの
 教徒等けうとらうへ信心しんこん自修じしゆして斯道すみちの門もんに及およぶ針路しんろ
 を指授さしあづかる神理しんりの概畧かんりやくを論述ろんじゆつありしものあり
 看みむ人ひと能よく此意このいを了解りやうかいすべし

神理概論俚諺解

終

神理繁論俚諛解跋

大凡天下萬物造化無不神理
天地日月君臣父子皆以神理
之功用而成以行其常道其神
之為言伸也至明至靈具眾理
而應萬事者也欽我教祖則天
命敬神道以教后生明察前聖
之所未發處以成天地之一大

教法也親炙門人森下老師承
 教祖之訓詁以成一篇名曰神
 理繁論使此本教學徒為學道
 之要覽今雖云繁論宗備神理
 之全焉然愚夫愚婦或未詳於
 其文談句趣似難解釋由尼岡
 先生亦以俚語一一解釋以示
 男女論辯簡易可以為斯學之
 指南矣余一覽閱心甚欽慕乃
 忘拙謹識

后學大朝鮮國安駟壽謹
 跋敬書于本局

初

朝陽堂

明治十七年十一月十九日版權免許
同年十二月刻成

原著者

岡山縣士族

木林 下景端

東京府本所區横網町二丁目
十一番地寄留

註釋人

廣島縣士族

片岡正占

岡山縣備前國御野郡東古松村
五番地寄留

出版人

岡山縣平民

葉浦平八郎

岡山縣備前國御野郡上中野村
十六番地寄留

可
有
主
海
河
詩
藏